自己決定志向の強い脳卒中患者に対する「施設経由の段階的在宅復帰支援」の有効性

所属機関：医療法人臼井会 田野病院 リハビリテーション部
演者： ○森本 一洋、藤田 綾（作業療法士）

【はじめに】

地域連携が重要視される中、独居かつ強い自己決定志向を持つ患者の退院支援は困難を極める。今回、在宅復帰を強く希望した脳梗塞患者に対し、多職種連携による施設経由の「段階的復帰プロセス」を構築し、自宅退院に至った症例を報告する。

【症例紹介】

60 代男性。脳梗塞後、強い自立志向から自宅退院を希望したが、家屋の物的バリアと家族の不安により直接の退院は高リスクと判断された。

【経過】

本人希望と安全性との乖離を埋めるため、多職種カンファレンスにて「施設を経由した段階的復帰計画」を立案した。入院中から家屋訪問を実施し、施設入所後も当院と施設間で週次連携会議を継続。施設生活でのトラブル発生時には本人・家族の不安を共有・解消することで、入所生活を「自宅復帰に向けたリハビリ期間」と再定義した。この密な伴走支援により、本人の自己効力感を維持しつつ自宅退院を実現した。

【考察・まとめ】

本症例は、自己決定を尊重しながら医療安全とのバランスをとる調整プロセスの有効性を示した。「施設を経由する段階的復帰」というモデルは、高リスク独居患者の在宅復帰を支える再現性の高い支援形態であり、医療・介護・福祉の壁を越えた伴走型連携こそが、その人らしい生活を継続させる鍵であると考える。